

令和6年12月16日
生涯学習・文化財課
担当 竹内
(内線 5346)
直通 087-832-3786

記念物の指定にかかる国の文化審議会の答申について

国の文化審議会（会長 島谷 弘幸）は、令和6年12月20日（金）に開催される同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、史跡及び天然記念物の追加指定等について、下記のとおり文部科学大臣に答申を行いましたので、お知らせします。

記

1 答申される香川県内の記念物

(1) 史跡

新名称 史跡「讃岐遍路道 曼荼羅寺道 甲山寺境内 善通寺境内 根香寺道
志度寺境内 大窪寺道」

↑

旧名称 史跡「讃岐遍路道 曼荼羅寺道 善通寺境内 根香寺道 志度寺境内 大窪寺道」

※今回の追加指定に伴い、名称が変更になります。

2 文化財の概要

資料1のとおり

3 答申される史跡の件数

(1) 史跡（特別史跡含む）の件数

全国の新規指定件数6件、追加指定等件数30件

香川県の追加指定件数1件

答申・告示後の史跡の指定件数1,911件（うち特別史跡64件）

答申・告示後の香川県内の国指定文化財件数

指定件数185件、うち史跡26件（特別史跡1件含む）

さぬきへんろみち 讃岐遍路道 まんだらじみち 曼荼羅寺道 こうやまじけいだい 甲山寺境内 ぜんつうじけいだい 善通寺境内 ねごろじみち 根香寺道 しどじけいだい 志度寺境内 おおくぼじみち 大窪寺道

1 四国遍路の概要

四国遍路は、弘法大師ゆかりとされる多数の寺社を巡る、長大な霊場巡礼であり、弘法大師信仰に支えられ、僧侶や修験者から民間に広く普及した我が国を代表する巡礼である。四国4県にまたがり88か所の札所を繋ぐ遍路道は、四国全域という広い範囲に配置された寺社（複数の霊場）を巡る回遊型巡礼を支えた円環状の巡礼道であり、全長1,400kmにも及ぶ。

その始まりは定かではないが、平安時代後期の『今昔物語集』や『梁塵秘抄』などに「四国の辺地」と記されるように、僧侶等による修行に源流が認められ、中世末頃には、僧侶等による修行に加え、僧侶以外の人びとによる巡礼も始まる。

江戸時代に入り、「八十八ヶ所」が固定化し、貞享4年（1687年）の『四国辺路道指南』（真念編著）が出版されて以降、現在に続く「四国遍路」の形式が広く普及していく。大師堂の建立や茶堂、通夜堂、道標の設置など、札所や遍路道が徐々に整備されていく。

明治時代には政府による宗教政策（神仏分離）の影響を強く受け、一部の札所の移転等の変容はあったが、維持され、現在にまで継承されている。

四国遍路の本質的価値は、「江戸時代に確立・定着した四国遍路の実態と変遷を示す」ものであると言え、以下の3点に集約できる。

- ①江戸時代に確立した特徴的な巡礼の様相を伝える札所と遍路道
 - ②四国全域を円環状に廻る回遊型巡礼を反映した遍路道
 - ③一般的な江戸時代の社寺とは異なる方向で発展した札所
- これらに加えて、その他の価値として以下の点も挙げることができる。
- ・札所として固定化される以前の多様な歴史を有する。
 - ・かつての景観（佇まいや面影）を今なお良好に残す。
 - ・絵図や日記などに代表される動産資料から四国遍路道の歴史をうかがい知ることができる。

2 讃岐遍路道の概要

讃岐遍路道とは、四国遍路道のうち、香川県域に所在する江戸時代に確立・定着した四国遍路の実態と変遷を示す札所と遍路道で構成されるもので、第67番大興寺から第88番大窪寺までの22か寺が所在する、延長約190キロメートルの道筋である。

これらのうち、平成25年に82番札所根香寺に向かう「根香寺道」、平成26年に第72番札所曼荼羅寺に向かう「曼荼羅寺道」、平成29年に第75番札所の「善通寺境内」、令和3年に第88番札所大窪寺に向かう「大窪寺道」、令和4年に第86番札所「志度寺境内」が既に史跡指定されている。

3 甲山寺境内の概要

四国八十八ヶ所霊場第74番札所甲山寺は、医王山多宝院と号し、善通寺市弘田町に所在する真言宗の寺院である。弘法大師空海の誕生地である第75番札所・善通寺から1.2キロメートル北に位置する末寺である。

縁起によれば、平安時代初期に空海が寺院建立の霊地を探し求めていると、甲山山麓の岩窟から老聖者が現れ、「ここが霊地なり。堂塔をこの地に建立するがよい」と告げられ、毘沙門天像を彫像し、岩窟に安置したのが創建という（『先達経典』四国八十八ヶ所霊場会）。また、江戸時代後期の地誌『西讃府志』によれば、満濃池修築の別当を命じられた空海は、この岩窟で修築成就を祈願し、薬師如来像を彫像、安置すると、空海を慕う数万人もの農民の協力で早期に修築が完成したため、朝廷からの褒賞を以て堂宇を造営したのが開山とする。

本尊の薬師如来坐像や地藏菩薩立像は 12 世紀頃の制作とみられることから、平安時代後期までには創建されたと考えられる。

中世に入ると、応永 19 年（1412）に北野天満天神の法楽のために讃岐の虚空蔵院（与田寺）覚蔵坊増範が願主となり勸進した京都北野教王堂一切経（『大日本史料 第七編之十六』大報恩寺蔵）を書写した諸国 200 余名のうちの一人に「讃州甲山寺 幸賢」がみえ、史料上の初見となる。

また、天正 12 年（1584）の天霧城落城（国指定史跡「天霧城跡」）に伴い堂宇は悉く焼失したと伝えられるが、その後、札所を巡った僧澄禅による（『四国遍路日記』承応 2 年〈1653〉）に「本堂東向き、本尊薬師如来」とあり、僧真念の『四国辺路道指南』（貞享 4 年〈1687〉）には 74 番札所として「山をうしろに堂ひがしむき」とあり、少なくともこの頃までには本堂が再建されたと考えられる。

その後、元禄 7 年（1694）に「甲山寺及絶破候」のため、本堂建立に際して材木の伐採を藩に願い出ており（「諸願書之控」『甲山寺文書』）、境内整備に着手するが享保 20 年（1735）になって完成をみている（現本堂）。その後、寛保 2 年（1742）には大師堂が再建され、宝暦 2 年（1752）の鐘楼、明和 6 年（1769）の山門（現存）、天明 2 年（1782）の客殿（現存）・鐘楼（現存）の修造、文化 13 年（1816）に大師堂の再興（現存）が順次進められ、19 世紀前葉には伽藍整備が概ね完了した。

遍路道は、甲山北側を東へと回り込み山門へ至り、75 番善通寺へは門前の弘田川に架けられた石橋を渡り南へ向かった。山門を潜り参道を西へ進み、石段を上がると本堂があり、南へ折れた一段上のテラス面の大師堂とは廊下で接続されている。大師堂奥の甲山山腹には、開山の由緒となる毘沙門窟が開口しており、本堂や大師堂などの主要境内地と甲山を一体化させる。

以上のように、甲山寺は、平安後期までには創建され、近世には誕生院（善通寺）の末寺だけでなく四国遍路 74 番札所寺院として栄え、現在に至る。江戸時代には藩の祈祷寺のような、安定した経営基盤をもたなかった当寺にあっては、四国遍路の札所としての位置付けが存立に大きく関わったとみられ、これらは簡潔にまとめられた伽藍配置や規模、関係史料からうかがい知ることができる。

このように、甲山寺は遍路札所を構成する主要堂宇が背後の甲山と一体的に形成された境内地が『四国遍路名所図会』（寛政 12 年〈1800〉）などに描かれた往時の姿をよくとどめており、讃岐における遍路札所の実態を考える上で重要である。

4. 既往の調査

しこくはちじゅうはちしよれいじょうだいななじゅうよんぱんふだしよ こうやまじちようさほうこくしよ
「四国八十八ヶ所霊場第七十四番札所 甲山寺調査報告書」

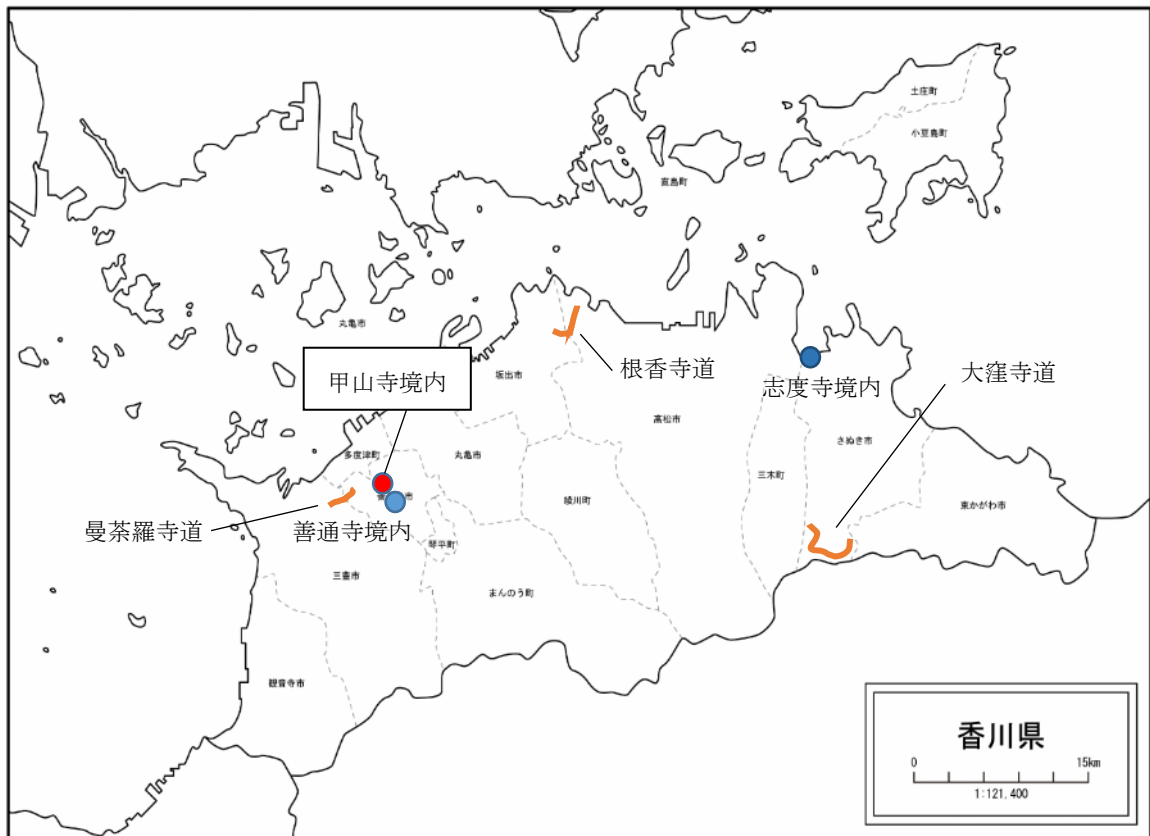
調査機関：香川県・香川県教育委員会

調査期間：平成 21 年度～平成 26 年度（平成 29 年 報告書刊行）

調査概要：所蔵文化財の調査



讃岐遍路道 (甲山寺境内) の位置図①



讃岐遍路道 (甲山寺境内) の位置図②